

福沢諭吉が創立した慶応大の出身で「新脱亜論」などの著書がある渡辺利夫・拓殖大総長に時事新報の今日的意味について聞いた。

今、福沢が生きていたら、激しく論陣を張っているんじゃないでしょうか。時事新報に「脱亜論」が発表された明治18年当時と同じぐらい極東アジアの情勢は緊迫していますからね。

脱亜論に込められているのは、いかに日本の独立と自尊を保つのかという「生存リアリズム」。福沢はもともと清国や朝鮮とともに列強の侵略に抗する「興亜」の思想に立っていました。朝鮮が内乱と政争を繰り返し、その度に宗主国の清が介入する構図が変わらないことに絶望して脱亜論に転換したのです。

## 諭吉が生きていたら

渡辺利夫・拓殖大総長に聞く



福沢は朝鮮の自主独立、近代化のために留学生や開化派の若手官僚を支援していました。門下生を朝鮮に送り、ハンゲルの週刊新聞も出している。ところが、その開化派による守旧派打倒のクーデターも一度は成功しながら、やはり、清国の軍事介入で「三日天下」に終わるわけです。

# リアリズムで打開

そういう状況下で、福沢は「この二国を視れば、今の文明東漸の風潮に際し、逆もその独立を維持するの道あるべからず」と考えた。このままでは、背後のロシア南下の火の粉が日本にも降りかかると見通したのです。血を吐く思いで「東亜の悪友を絶つべし」と世に問うた社説が脱亜論なんです。「アジア蔑視」と批判する人もいますが、後の歴史を知ったうえで、イデオロギーで過去の言説を断罪するのは正当ではない。

朝鮮半島が日本にとって地政学的に決定的に重要であることは現代も変わりません。今、韓国は異常ともいえる反日政策を

とり、北朝鮮は核兵器を開発中だ。背後の中国は帝国主義的性情をあらわにしている。その中で日米韓の関係こそが日本にとっても、韓国にとっても、死活的に重要なことは明らかなのですが、韓国は、むしろ膨張する中国への傾斜を強めている。大に事える「事大主義」に先祖返りしているようです。

福沢は明治15年、時事新報に「文に属する攻略（外交）」にして独りその働きを逞うすること甚だ易からず、必ずや武力の之に伴う者あるに非れば攻略の目的を達するに足らず」と書いています。現代日本にあてはめれば外交打開には抑止力こそが重要だというリアリズムに他なりません。それは日米同盟の強化でしょう。集团的自衛権行使も容認されていない現状を福沢なら社説でどう書くでしょうか。